

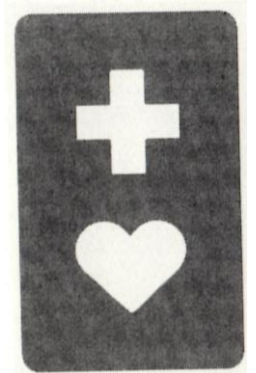
# ヘルプマーク・カラーユニバーサルデザイン

東京都福祉保健局

## ヘルプマーク

障がい者や高齢者、子供、外国人など、日常生活の場合において援助や配慮などを必要としている人がいます。援助や配慮の要因は様々ですが、外見から分からない場合があります。

義足や人工関節を使用している方、内部障がいや難病の方など、外見からは、一見ただけでは判断しにくいものです。「ヘルプマーク」(図1)は、こうした「目に見えない」障がいのある方などが、周囲の人に対して配慮を必要としているのを知らせることで、援助を得やすくなるよう、東京都が作成したマークです。

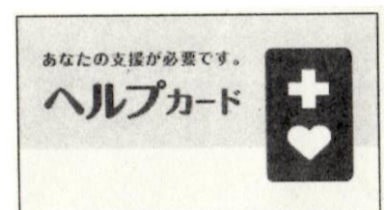


(図1)

マーク全体の色である赤は「ヘルプ=普通の状態ではない」ことを発信するものです。「♡」のイラストには、相手に「ヘルプする気持ちを持っていただく」意味もあります。シンボルマークで、周囲の人々が直感的に理解し、すぐに行動に結びつけられることを意図しています。障がいのある方などが、社会参加をする上での物理的・精神的な障壁を取り除くバリアフリーは、1980年代から進展しました。人々の意識も徐々に変化しましたが、「目に見えない」障がいについては、なかなか率先した行動につながりませんでした。

2020年オリンピック・パラリンピックに向け、外国人観光客にも分かりやすい案内用図記号にするよう、経済産業省によってJIS(日本工業規格)が改正され、それらの図記号の一つに「ヘルプマーク」も仲間入りし、全国共通のマークとなり、現在は30都道府県へ広がっています。

ヘルプマークは、援助や配慮を必要としている人がかばんなどに付けて使用できます。(図2)また、具体的にどういった援助をしてほしいか、シールに記載し、貼ることもできるようになっています。



(図2)

人々の思いやりの行動を自然に促すとともに、援助と配慮を希望している人にも暮らしやすい「共生社会」の推進へ、ヘルプマークがその一助となるよう願っています。

## カラーユニバーサルデザイン

色の見分け方は大きく分けて5つの型があり、個人差があるといわれています。中でも赤と緑を見分けにくい方は、日本では20人に1人とのことです。色弱者といわれることもあります。実は、緑色系の色の違いや、吹雪や煙の中でも他のものを見分けることできる人でもあります。多数派が常識としている色使いの中に

いるがゆえに、「色弱者」となっているだけで、ジャングルでの暮らしや、山火事や吹雪から逃げる際に役立ってきた、遺伝子の多様性という生存戦略ともいえるのです。そのような方々は、誰にでも見えやすい色を使うことで弱者ではなくなります。また、煙の中で多数派を安全な場所にまで導くことができる人であるかもしれません。

カラーユニバーサルデザインの例として、避難経路図等に誰にでも見えやすい色を使うことで、災害時に全ての人を安全な場所へと導くことができるようになります。

これからはさらに多様性に配慮したカラーユニバーサルデザインが広がるよう願っています。



## 他にもある障がい者支援マーク

①障がい者のための

国際シンボルマーク

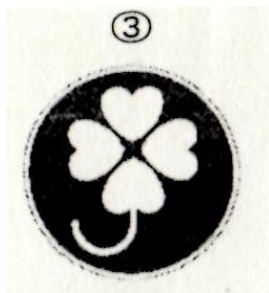


②盲人のための

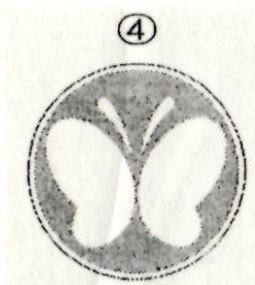
国際シンボルマーク



③身体障害者標識



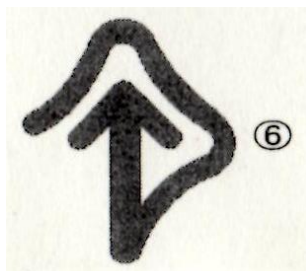
④聴覚障害者標識



⑤補助犬マーク

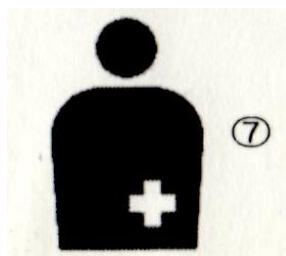


⑥耳マーク



⑦オストメイトマーク

\*がんなどで人工肛門・  
人工膀胱を造設し、  
排泄機能に障がいがある人



⑧ハート・プラスマーク

\*外見からは分かりにくい  
身体内部に障がいがある人

